

(1) 「社会科学を学ぶことがどうして将来役立つのか」について考えたこと

「社会科学を学ぶことがどうして将来役立つのか」について
考えたこと

はじめに

たぶん僕は一橋大学の中で最も若い教師の内の一人ではないかと思えます。若いと言うことは、皆さんがこれから経験する四年間（人によってはそれ以上？）と同じ大学生活を最も鮮明に思い出すことのできる教師であるということですが。また幸い僕は一橋大学の卒業生です。一九八七年卒業です。僕が十数年前に経験したことと皆さんがこれから経験することはそんなに大きくは違わないと思えます。だから僕が十数年前に疑問に思っていたこと、その疑問に対して僕がどのような回答を与えてきたのかをここで書いてみることは皆さんに多少とも意味のある情報を与えることができるかもしれません。

青 島 矢 一

これからお話することの主題は「社会科学と呼ばれる領域の学問を学ぶということにはどんな意味があるのか」、言い換えれば「一橋大学で四年間勉強して何の役に立つのか」ということです。僕にとってこの問題は、大学卒業して学者になるまでの九年間に、「社会科学と呼ばれる領域で研究することには何の意味があるのか（経営学者として研究することには何のためなのか）」、「何で社会科学と呼ばれる学問の一端を学生に教えたりするのか（僕は何を教えることができるのだろうか）」という疑問へと引き継がれていきました。これは僕の職業人生にかかわる結構本質的な問題であって簡単に解決できるものではないと思えます。ずっと考えていくことなんでしょう。ただ現時点での僕なりの（仮の）回答はあ

ります。それをここでまとめてみようと思います。現在の僕が、学者としての自分の生活をいかにして正当化しているのかを書き留めておきたい、そう思います。みなさんの中には「俺達は学者になんかなりたくないから関係ないよ」という人がいるかもしれません。でも学部時代の僕は学者になる気などさらさらなかったのです。ゼミの先生に誘われるまでは大学院に進学するなんて微塵も考えていなかったのです。だから僕が学部時代に社会科学を学ぶことの意味に疑問を抱いたのは決して学者としての立場からではなかったのです。むしろビジネスマンとして社会で生きていく自分にとって一橋大学で勉強することがどんな意味をもつか、ということを考えていたんだと思います。

皆さんの中にもこうした疑問を持つ人がその内きっと出てくると思います。社会科学系の大学で学問を学ぶことの意味は分かりにくいものだと思いますから。そんなとき僕の考えてきたことが少しは参考になるかもしれない、そう思ってこれを書いています。「そんな難しい疑問を三十そこそこの若造に聞いても仕方ない」といわれるかもしれない。年の多い教授の方々の方がしっ

とした回答を与えてくれるでしょう。でも悟りをみらしてしまった人の話より、まだよくわからずに苦惱している人間の話の方が現実味を持つことがあるかもしれません。そんなことを期待して話を進めていきたいと思えます。おつきあいください。

それから、以下で社会科学などというたいそうな言葉を何度も使いますが(もう既につかっている)僕の専門は企業組織論(特に新製品開発組織論)であって本当は社会科学全般を語れるような立場にはありません。だから僕が社会科学というときには僕の専門領域の方へと強いバイアスがかかっているであろうことを念頭に置いてください。

話に入る前にこの小論の要旨を以下で書かれる順に簡単にまとめておきます。

(1)社会科学を勉強するときには高校時代とは異なった姿勢が必要になる。

・ 大学一、二年の頃の僕は商学部で社会科学を勉強することの意味がよく理解できずにフラストレーションを感じていた。その原因は、「丸暗記的姿勢」からは脱却していたけれども、「答えは一つの姿勢」を転換で

(3) 「社会科学を学ぶことがどうして将来役立つのか」について考えたこと

きないという意味で高校での勉強を引きずっていたからである。

・社会科学を勉強する上では「答えは一つの姿勢」がどうしても邪魔になる。社会現象は不安定で一般的な法則が成り立ちにくい。さらに社会現象は多面的で、つまり様々な見方からの解釈が可能であり、一つの見方から正解に見えるものは他の見方からは正解でなかったりする、というのが理由である。

・社会科学の理論は「視点」、「道筋」、「道具、材料」の三つのレベルからなっている。社会科学を勉強するときには、「道筋」から「道具、材料」へとレベルを降りて深掘りしていくだけでなく、常に「視点」レベルに立ち返って疑問を抱く必要が出てくる。

(2)社会科学の理論と我々の日常生活は決して遠くない。「理論は理論、現実が現実」とか「理論は学者や研究者のもの」と割り切る必要はない。

・そもそも社会科学の理論とは、皆さんが社会で普段観察するような現象を説明したいという思いから始まっている。その意味では、日常起きるいろんな事柄に皆さんが説明を与えているというその行為自体既に社会

科学の理論をつくるという作業の一部である。

・ただ理論と呼ばれるのはその説明が、皆さんが通常与える説明よりも、多少首尾一貫していて精緻に論理展開されているだけである。

・したがって、特殊な理論的用語や数式に圧倒されたり、そうした特殊用語や数式を表面的に会得して満足した気になるのはよくない。

(3)大学で社会科学を学習することは優れた企業人になることに関係している。その意味で将来にとって役に立つ。

・優れた社会人とは少なくとも次の三つの要件を満たしている。(a)自分の仕事の現状や常識といわれているものを常に深く理解し、疑問をいただき、様々な角度から再検討を試みている。(b)構想をもち、構想実現に関わる様々な要因間の相互関係についての深い読みと洞察力を持っている。(c)他人の考えに柔軟である一方、いかなる意思決定の場でも一貫した自分自身の理論を持っている。

・大学で社会科学の学問を学習することはこれら三つの要件を身につける格好の訓練となる。

・具体的には優れた理論家の書いた著作を深く時間をかけて読むこと、ゼミ活動において先生となるべく親密にそして真剣につきあうこと、自分のものの見方を常に反省的に検討すること、の三つが重要である。

前期課程では何を勉強すればよいのか

わからなかった

僕の出身の静岡はそんなに田舎ではないと思います。

でも、一四年前にはまだ、東京に出てくると言うこと自体でそれなりに緊張していたように思います(最初東京に来たとき一万円札を二枚握りしめて六本木に行って「これでお酒を一杯くらいは飲ませてもらえるだろうか」と思ってびくびくしていたことを憶えています)。だから東京にある一橋大学に合格できたということはとにかくうれしかったし、合格発表の当日、アメフトのクリムゾンともう一つ名前は忘れちゃったけどサークルのアメフトチームの両方に胴上げしてもらいました。大学に通うようになってまわりのみんながすごく偉いように感じられて、なにか良くわからないけれどもとにかく勉強しなければ、と思っていたように思います。実際一年生

の時にはわけもわからずいろんな勉強会らしきものに出してました。また当時知り合いに偉い先輩がいて(沿上さんという人で今は商学部⁽¹⁾の先生です)、いろんな難しい本を薦められて、全然よくわからないけどとにかく買ってみて触ったり飾ったりしていました。

一年目は授業もたくさんとってました。それに僕は体育会系のクラブにはいっていただけから結構忙しく、「充実しているんだ」と自分を納得させようと思えばできるような状況だったと思います。実際、最初の内は、「よくわからないけど高校の時とは違う学問というものを勉強しているんだ」という事実自体に満足感をおぼえていたように思います。でも長くは続きませんでした。

僕はどちらかというと実利を求めるタイプの人間だったから、「授業料払って大学で学問を学んで将来何になるんだよ。金になんのかよ。これじゃ元とれねえよ。」ということを少なからず考えていたように思います。当時は学者になる気なんて全くなかったから、自分の将来の生活と全く切り放して純粋に学問を楽しむなんて到底できなかったし。

理科系に進学していればそんな疑問を持たなかったか

(5) 「社会科学を学ぶことがどうして将来役立つのか」について考えたこと

もしれません。例えば医学部にいれば、将来患者さんを治療するために必要になる知識やスキルを身につけていくこと実感できます。医学部生はほぼみんな医者になることをめざしているだろうから「何のために勉強しているのか」ははっきりしていますよね。医学部の場合ほどはつきりつながりがなくても、機械工学を勉強している人は、例えばロボットを設計できるようなものかもしれないし、建築学科にいけばビルを設計するスキルが身に付いていく。将来の職業を念頭におきながら、自分の技術的スキルが高まっていくプロセスを大学生活を通じて実感できるだろうと思います。

じゃあ一橋大学商学部で勉強していて何ができるようになるのか。ここんところが当時の僕にはよくわかりませんでした。実際、理科系にいけば良かったかなと思っただけでもありません。もちろん苦労して合格した一橋大学をやめることは現実的ではありませんでした。経済学部には転部しようかとも思いました。これは本当に考えました。数学をいっぱい使った経済モデルを理解できて自分で数式モデルをかくことができれば、新聞でよく見るような経済予測が僕にもできるようなものではないかと思っ

たし、少なくとも何か身についた、つまり手に職をもった気がするのではないかと思っただけだと思います。結局僕が選んだ回答は、商学部で良くみられるパターンだと思いますが、公認会計士になるための勉強を始めることでした。これはあまりに安直で結構恥ずかしい思い出です(もちろん会計士になることが恥ずかしいことだと言っているわけではありません。僕の動機が恥ずかしいということです)。会計ができるようになるということは、はっきりと役に立つスキルだと思っただし、それ以前に資格をとること自体が少なくとも何かが見についた証にはなると思っただけだと思います。でもそのために僕は予備校に通うことになったわけで、せっかく合格した大学の豊富な資源を十分利用することなく一時期を過ごすことになったのです。

組織論を勉強して少しおもしろくなった

僕が公認会計士の試験勉強をきっぱりとやめるきっかけとなったのは、榊原先生(この先生は現在慶応SFCにいます)のゼミに入って、ガルブレイスという人が書いた『Organization Design』という本を読んだことで

す(もちろん試験勉強がつらくていやだったことも大きな理由だった)。この本、今ではそんなにすごい本だとは思わないのだけれど、当時はおもしろいと思いました。その理由は、その時はそんなに深く考えてみなかったけれども、結局「組織とは何であるのか」という自分の常識のようなものを覆し、全く新しい目で企業組織に関する現象を一貫して説明することができるようになったからだと思います。この本は、ノーベル賞をとったハーバード・サイモンという人の理論的アイデアを発展させて企業組織論としてきれいに整理したもので、「組織とは情報処理メカニズムである」という視点にたって書かれたものです。つまり簡単にいえば組織とはコンピュータのようなものだという発想ですね。情報処理の視点から、「なぜ企業組織はいろんなルールをつくるのか」、「なんで組織は階層構造をとるのか」、「何で事業部制組織がでてくるのか」といった組織構造に関する様々な現象が一貫して説明されました。もう少し言えば、企業組織の構造的な特徴に関する「なぜ」が、「情報処理能力の増大」と「情報処理負荷の削減」という二つの点から筋道たっ

てきれいに説明されたのです。現在の僕は、この情報処

理という考え方に対してあまり気持ち良さを感じませんが、当時は何かわかったような気がしたんだと思います。組織というのは企業組織に限りませんから、同じ視点から、僕が所属していた組織らしきもの、例えば、クラブとか高校のクラスとかで起きていたことを説明できるような気がしたので。

この時点で僕が組織理論を学ぶことの意味を本当に深く考えていたかどうかは疑問です。ただ少なくともこの理論を勉強したことによって「視野がひろがった気がした。それが心地よく感じられた。」ということは確かです。もちろん将来学者になる気はなかった当時の僕は、そうして組織論を学ぶことが将来役に立つんだということとを納得していたわけではありません。ただ、「おもしろいな」と思ったのです。そう感じた当時の僕は、今思えば、大学で社会科学を学ぶことの意味を直感的に理解していたのかもしれない。でも意識的ではありませんでした。いずれにせよゼミに入ってそういう機会に恵まれたのは幸運だったと思います。

(7) 「社会科学を学ぶことがどうして将来役立つのか」について考えたこと

高校での勉強と大学で社会科学を勉強する

ことの間には二つの溝がある

僕が最初の一、二年の間に一橋大学で勉強していることの意味を見いだせなかった理由は、良く言われることだけれど、高校の延長で勉強というものを考えていたからなんだと思います。高校の勉強、特に受験勉強は「つめこみ教育」という言葉で批判的な論調で表現されることが多いですよね。僕はこの「つめこみ」という言葉の背後には二つの姿勢があると思っています。まず「なぜは問わない。とにかく丸暗記する。」という姿勢。「丸暗記的姿勢」と呼んでおきます。二つめは「正解は一つであると信じる。」という姿勢。「答えは一つの姿勢」と呼んでおきます。ここで言いたいことは、社会科学系の大学で有意義な勉強をするにはこれら二つの姿勢が作り出す二重の溝を越えて「つめこみ」教育から脱却する必要があります。ということですよ。

前期課程の頃一橋で学問することの価値を僕が理解できなかったのは「つめこみ教育」から脱却できなかったからだと思っていますが、二つの姿勢の内、特に後者つ

まり「答えは一つの姿勢」に縛られていたことが大きかったと思っています。「丸暗記的姿勢」には高校時代から多少とも批判的であったし、「大学に行ったら自身でモノを考えなければいけない」なんて文句はいろんなところでいわれていました。だから「丸暗記的姿勢ではやっていけないはずだ。自分で疑問をもって考えるようにしなければ。」ということは少なくとも頭ではわかっていたと思います。ところが「答えは一つの姿勢」からの脱却には時間がかかりました。

「丸暗記的姿勢」からの脱却とは、例えば、「1+2」なんて問題があつて、マイナスの数字を割るって言うことはどういうことなのかを考えるようになることです。でも普通、答えが「100」だということには異論をはさまない。正解はやっぱり一つなんです。リングが落ちるのは引力のせいだと習う。リングが落ちるのは「リングが地球を愛しているから」と考えてはなぜいけないのかわかることは考えない。もちろんこれは間違っている(と思う)。でもそう考えてみたっていいかもしれない。でも馬鹿じゃないかと思われる。

これらの例のように自然科学の領域では「答えは一つ

的姿勢」をそのまま保っていてあまり問題はないのだと思います。だから自然科学系の大学に進学した人たちに
 とっては「丸暗記的な姿勢」からの脱却、つまり「自分
 自身で興味を持ち、自分で疑問をいだき、自分で解答を
 みつける」ようになることが最重要です。ところが「答
 えは一つの」姿勢からの転換は必ずしも要求されない。
 それは、自然科学的な現象についての人間による主観的
 な解釈の余地が非常に狭いからなだと思えます。解釈
 の余地が非常に狭いのは、自然現象が相対的に長期に渡
 って安定的に観察されるからです。

「答えは一つの姿勢」をあえて誤解を恐れずに「自然
 科学的学問観」といっておきます。高校での教育、特に
 受験勉強的な教育の問題の一つは、自然科学だけでなく
 あらゆる学問領域においてこの「自然科学的学問観」が
 浸透してしまっていることです。例えば、国語の試験で
 「この詩から感じられる感情を適切に表現しているもの
 を選べ」なんて問題がありますよね。「解答は『郷愁』
 だという。でも俺は『憎しみ』だと思う。なんでそう感
 じちゃいけないんだ。」「少し極端ですが、こんなことを
 思った人は結構多いと思います。つまり国語のような人

文の世界にまで「自然科学的学問観」を適用しているの
 が高校での「つめこみ」教育の問題なのだと思います。

ただし理科系に進学した人にとっての「つめこみ教
 育」の弊害は、社会科学系の大学に行った人の場合に比
 べればそんなに深刻でないかもしれません。さっきいっ
 たように「丸暗記的姿勢」を考え直すことだけに集中す
 ることができるからです。自然現象は安定しているから
 「答えは一つの姿勢」でいい。ところが社会現象はそん
 なに安定的ではありません。時とともに変化するし人間
 の意図が介入するから不確実な要素が多い。去年まで調
 子のよかった企業が今年は今全くダメなんてことはいくら
 でもあります。企業業績を高めるための一般的法則なん
 てないといっても良いと思えます。例えば「環境にやさ
 しい製品を発売すれば儲かる」っていつてみんなが発売
 して激しい価格競争になったら「環境にやさしい製品を
 発売すると儲からない」にたちまち変化してしまいます。⁽²⁾
 その上社会現象は「多面的」です。つまり一つの社会
 現象はいろんな側面から見る事ができる。そして一
 つの面から見たときの正解が他の面から見たときの正解
 だとは限らない。例えば、企業合併なんていう現象があ

る。何で企業は合併するのか。「そんなの社長に聞けばいい」とはいかない。社長一人で決めているわけではないかもしれないし、社長自身意識していない理由があるかもしれない。

ある人は「お互いの強みと弱みを補完して企業競争力を高めるため」とか「市場独占力を高めるため」と考えるかもしれない。「企業間のやりとりや取引を効率化するために同じ組織にまとめてしまう」という解釈もありえる。そんな経済合理的な説明ではなく単に「企業を大きくしたいという成長願望」からだという説明を強調する人もいるかもしれない。組織内の政治的なプロセスに注目して「トップマネジメントを含めた人員削減のための口実作り」といううがった見方もあるでしょう。社会的プロセスに注目する人は「企業合併が流行となつてみんなが模倣行動をしている」と考えるかもしれません。もちろん一つ一つの事例を詳細に検討分析していけば、それぞれの場合でどの説明がより正しそうなかはわかってくるかもしれない。しかしそれでも最終的にどれが絶対的に正しいということは言えそうにない。それじゃあ、いろんな説明を考えることに意味がないかという

とそうでもない。それぞれの説明はそれぞれ個々固有の概念レンズをもっていて、その概念レンズを通して現象についての一貫した説明を与える⁽³⁾。そのプロセスで、例えば企業合併という現象に対する僕たちの理解は深まってい、そう思います。後でもう少し詳しく説明しますが、特定の概念レンズを通して一貫した説明というものを突き詰めると社会科学の理論と呼ばれるものになります。

もっと身近な例でいえば「僕がここでこうして新入生向けに文章を書いている」という現象があります。なぜなのか。いろんな切り口から説明できます。「大学教官の中での持ち回りで(若いから)やらされている」、「原稿料が欲しくて書いている」、「教育者としての熱意から書いている」、「少しでも目立ちたいから書いている」、「学生に名前を知ってもらいたいから書いている」等々。「僕が正解を知っているかというところでもない。これが「正解」と自信をもって言えるわけではない。むしろみんなそれなりに正解だとも言える。ここで重要なのはそれぞれの説明が「僕」の行動に関して特定の視点をもっているということです。例えば、最初の「持ち回り」説

では、僕の行動が「一橋大学という組織の持つ制度的ルール」に縛られているという見方を背後にもっている。「原稿料説」には金銭的利益によって行動を左右される僕の姿が隠されている。「目立ちたい説」では他人に認められたいという名誉欲をもつ僕がいる。さっきの企業合併の話と同じです。結局社会現象は様々な角度からの解釈が可能なのです。そしてどの解釈が正しいのかということよりむしろ重要なことはそれぞれの解釈の与える社会に対する洞察とその解釈の一貫性だと思います。

大学一、二年の時の僕にはこういった考えはなかった。当時なんとなく消化不良的な感じを抱いていたのは、結局のところ、大学の講義を聴いても何にも解答らしきモノを与えてくれないという不満からだのだと思います。「こうしたら企業は良くなる」とか「こうすれば経済はうまくいく」とかそういうものを求めていたんだと思います。そういう姿勢で授業にでる限りどうしてもフラストレーションを感じざるをえない。くだいようですが、そもそも一つの現象(例えば、企業が良くなるとか経済がよくなるとかいった)に一つの絶対的な解答があるのではないからです。「こう見ればこう説明できる」

「こっちから見ればこんな風な解答が導き出される」、そういうものだとどこかで考え直す必要があったんだと思います。「でも正解がないんだったらなんでも勝手に好きなことを言えば良いってことなのか。僕らは大学で学者が好き勝手にしていることを聞かされているということなのか。それで学問を教えてもらっていると騙されているのか(怒)」。そう言う人がいるかもしれません。そういうことではないんです。言いたいことは、社会科学の理論を考える場合に、それが絶対的な正解を与えるのかという「正解」の基準ではなく、それが社会に対する鋭い洞察をもっているのかという「洞察力」と、それが一貫した説明体系をもっているのかという「一貫性」という基準で考える必要があるということです。「洞察力」と「一貫性」という基準がある限り好き勝手なことを言えるわけではないのです。

一四年前の僕にはこのところがわかっていなかったのだと思います。大学三年生になって組織論を勉強したときもたぶん「答えは一つの姿勢」から意識的に脱却していなかったと思います。ただその時、情報処理的組織論が絶対的解答だと思っておもしろいと思っていたの

でありません。そうではなくてそれがもつ新しい切り口がおもしろいと思ったのです。それと同時にその切り口から展開される説明の筋道の一貫性が美しいと思ったのです。繰り返しになりますがそういう意味で直感的に社会科学を勉強することの意味を理解していたと言えるのだと思います。

三つの階層で考えてみる

正解がないとすれば社会科学（の理論）を学ぶとは何を学んでいることなのか。それに関して上で説明してきたことをもう少しまとめた形で話してみようと思います。

僕は社会科学の理論を三つの階層で考えています。第一層は「視点」、第二層は「道筋」、第三層は「材料と道具」です。あらゆる理論はこの三つを含んでいると思っています。みなさんがこれから勉強する経済学や社会学、経営学には様々な理論がありそれぞれ独自の「視点」と「道筋」と「道具、材料」を含んでいます。上で社会現象は多面的であることを説明しました。それらの面の中での面から現象にアプローチするのか、それが「視点」です。「概念レンズ」と言い換えても良いかもしれ

ません。そして、特定の視点から社会で起きている様々なことの間つながりの体系を組み合わせます。その体系が「道筋」です。「なぜ風が吹けば桶屋が儲かるのか」に対する一貫した説明経路と考えて良いと思います。「材料」とは社会で起きていることそのものです。ただ「視点」によって見えるものと見えないものはあると思います。「道具」とは「道筋」を人に伝えるために必要になるものです。それぞれの理論は道筋を効率的につたえるための独特の言語やツールがありますよね。理論を勉強するときに通常一番難しく見えるところかもしれません。

僕の専門の企業組織論のことで少し説明してみよう。企業組織論と一口にいても様々な理論があります。僕が大学三年生の時に「おもしろい」と思った組織論については既に話しましたね。それは企業を情報処理メカニズムと見る「視点」をもっていました。その視点から組織に関する様々な現象（材料）を説明するための一貫した論理だて（道筋）を作り上げていきます。例えば、ユーザーのニーズが多様化するとなぜ組織は事業部制のようなよりフラットな組織になっていくのか。そのこと

が、ユーザーの多様性による情報処理負荷の増大に対応するために、組織は自己充足的組織単位を形成することによって情報処理能力を拡大させる、というように説明される。他の組織現象に関しても同様の一貫した説明が行われます。ここでは、例えば、「情報処理」、「スラックリソース」、「最小有効多様性」、「リダンダンシー」など普段は馴染みのない少し特殊な言葉(道具)がでてくる。これとは全く異なった組織論もあります。例えば、組織行動を政治闘争という「視点」からとらえる組織論。

つまり政治的パワーを獲得するプロセスとして組織の行動を考える。例えば、「何で企業が天下りを受け入れるのか」、「何で製造企業の取締役として大手の銀行の人をひっぱってくるのか」、こういったことが「組織として社会の中で発揮できる政治的パワーもしくは交渉力を高める」という点から一貫して説明される(道筋づくり)。もちろん、政治闘争という視点は組織と組織の関係だけでなく、組織内部にも適用できます。「なんであんな新製品が導入されたのか」、「なんで組織変更が行われたのか」といったことが統一体としての企業にとっての合理的な選択としてでなく、組織内部の利害関係者間での交

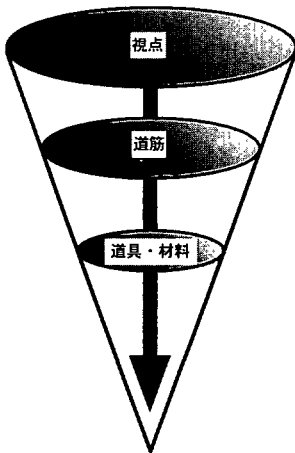
渉の結果として解釈される。こうした理論でも、「パワー」、「コンフリクト」、「コオプテーション」、「コアリション」なんていうちょっと特殊な言葉(道具)が用いられる。

この他にも、「組織生態理論」、「制度理論」、「組織学習理論」、「知識創造理論」(これは本学の野中教授のものです)等々いろいろあります。それぞれ強調点の差はあれ、「視点」、「道筋」、「道具」、「材料」をもっています。重要な点はそれぞれの理論の内どれが正しいなんてことはいえないということです。例えば、企業組織が部門別に編成され、平社員から係長、課長、部長へと階層をつくっているという現象がある。この現象についてことなる理論は異なる視点からことなる仕方の説明します。情報処理の組織論は情報処理の効率化として、政治的モデルはパワーを得たい人々が力を行使するために必要な道具として、組織学習理論や知識創造理論は個人個人に頼らず組織としての知識を創造し蓄積していくためだと、例えばこんなふうです。それぞれ一理あるのです。

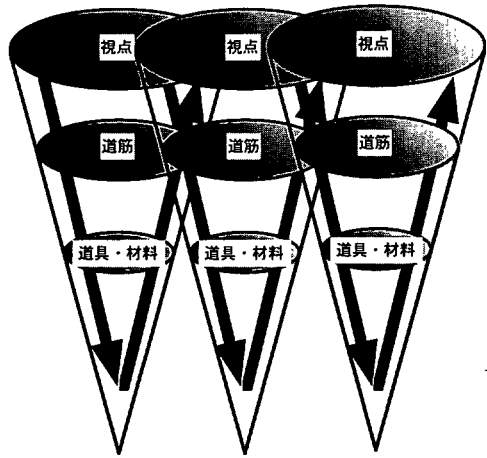
こう考えてくると、社会科学系の大学で学問を学ぶということは、特定の理論の内部で深く掘り下げていくだ

(13) 「社会科学を学ぶことがどうして将来役立つのか」について考えたこと

自然科学「的」学習プロセス



社会科学「的」学習プロセス



だけでなく(当然これも重要です)、視点レベルに遡ってそれぞれの理論を反省的に理解し、異なる「視点」に支えられている理論の間を飛び回りながら社会現象についての理解を深めていく、そんなことも重要になってくるのだと思います。自然科学と社会科学を厳密に二分法的に考えるのは良くないと思いますが、あえて自然科学的学習と社会科学的学习を対比すると上のような図になるのではないのでしょうか。

つまり自然科学的学習では特定の「視点」のもとで「道筋」から「道具・材料」へと深く掘り下げていくことによって現象の理論的理解を進めていきます。その過程でほとんど理論は精緻に洗練されていきます。この場合「視点」そのものにはそれほど頻繁に疑問を抱く必要はない。一方社会科学的学习でも「視点」を固定して理論的理解を洗練させていくけれども、同時に比較的頻繁に「視点」レベルに立ち返って疑問を抱き、別の視点から現象を考え直してみたりすることが必要になります。社会現象は相対的に多面的だから様々な面から見てみると理解に到達できない。「視点を固定した継続的深掘り」と「視点のシフト」という二つの活動のバランスで

いうと、社会科学的学习では自然科学的学习に比べると後者の意味が相対的に大きいということになります。だから、「視点を固定した継続的深掘り」をしている時でも「視点」を常に意識することが相対的に重要になってくると思います。

社会科学の理論と日常生活

「なんとなくわかるようなわからないような……。でも、どっちにしてもやっぱり社会科学の理論は実際役立つようには思えないんだけど。」と思う人もいるでしょう。そう考える人の方がむしろ多いと思います。だから、英語を話せるようにする授業とかコンピュータを操縦できるようにする授業とか、実際に即戦力に結びつくような教育サービスを大学に求めるような動きが出てきているのだと思います。これまでの大学教育に問題があったということは否定できないかもしれませんが、確かに僕を含めて学者というのは研究者であって教育者としての訓練を受けてきていません。だから教える側に問題があることも確かだと思います。

でもそのことと大学で学問を勉強することが本来的に

役に立たないということとは別問題だと思います。大学教育が役に立たないと考える最大の理由はたぶん学問の扱う理論的領域と皆さんの実際の社会生活との間に相当距離があると考えられているからだと思います。つまり「理論は理論、現実は違う」と。ところが僕にはそう思えないのです。社会科学の理論はそもそも皆さんの経験している社会現象の説明を出発点としているのだからそんなに距離があるはずがない。距離があると思えてしまう理由はたぶんそれぞれの理論が特殊な言語や道具を用いていることが多くて、それらにばかり目がいつてしまつて、理論が本来的に扱おうとしている日常的で素朴な疑問を覆い隠してしまっているから、ただそれだけのことではないかと思っています。

そもそも社会科学の理論とは、一般に皆さんが社会で観察する現象を説明したいという思いから始まっています。その意味では、日常起きるいろんな事柄に皆さんが皆さんなりに説明を与えているというその行為自体既に社会科学の理論をつくるという作業の一部だということです。ただ理論と呼ばれるのはその説明が、皆さんが通常与える説明よりも、多少首尾一貫していて精緻に論理

(15) 「社会科学を学ぶことがどうして将来役立つのか」について考えたこと

展開されているからなのです。ただそれだけなのです。だから、理論にくっついてくる特殊な数式や用語に圧倒されたりそれらを表面的に会得して満足した気になったりするのはよくない。むしろそれらの背後にある素朴な疑問やその疑問に対する説明の仕方に目を向ける、そうすると逆に特殊な用語や数式の意味もだんだん見えてくる、そう思います。

力のある人、力のない人

一橋大学で学問を学ぶことがどう社会で役に立つのかを考えるために、社会に出ていて優れている人がどんな人なのかを僕なりに考えてみましょう。僕は仕事の関係上製造企業で働く人たちとおつきあひすることがあります。そういった場で「力のある人」と「力のない人」が僕の間からは非常にはっきりして見えます(この「力のある」とか「力のない」という言葉は僕の先生がよく使った言葉で要するに「できる人」と「できない人」という意味。たぶん単に「できる」だけでなく「力がみなぎっている」というような意味が込められていると思う)。これは同僚の人たちと話してもだいたい一致しています。

もちろん僕の同僚というのは一橋大学商学部（1）の先生だから、こうした人物評価には「一橋商学部バイアス」がかかっていることはあると思います。でもやっぱり「力のある人」と「力のない人」の間にははっきりとした違いがあるように思います。それは何なんでしょうか。僕はこう思います。

まず「力のある人」とは、自分の関わっている仕事のありかたを常に本質に立ち返って考えられる人のように思います。例えば、自動車会社の営業で働く人を見てみましょう。営業とは車を売る仕事だと文字どおり受け取ってディーラーとのやりとりで追われ日常を過ごしている人もいるでしょう(実際は忙しくてそうせざるを得ない人が大半だと思えます)。しかし一方で、そもそも自分のやっている営業という仕事とは何なのかということをいろんな角度から深く考えている人もいます。例えば「営業とはモノをユーザーに届けているのか、それとも情報をマネージしているのか」、「顧客にどんな付加価値を与えているのか」、「組織全体にとって営業とはどんな役割を果たしてきたのか、今後どんな役割を果たすべきなのか」、こんなことを常に本質的に考えている人

が僕には「力のある人」に見えます。別の言い方をすれば、一見常識的に受け入れられていることを本質レベルまでさかのぼって理解し様々な視点からもう一度考え直してみることでできる人です。社会は常に動いているから昨日までの常識が明日は通用しなくなるかもしれない。昨日までの常識が明日は通用しなくなるかもしれない。「力のない人」は慣性にまかせて昨日までの常識のもとで過ごしてしまっています。「力のある人」は常識の本質を理解しているから視点転換の時期を心得ています。

第二に「力のある人」とは、構想をもちその構想を達成するにはどんな要因がどのように絡んでくるのかに関して深い読みと洞察力がある人だと思えます。例えば「今後はわが社も情報化が必要だ」なんてことは誰にでも言えます。「力のある人」それだけではないようです。情報化が企業活動の様々な側面にどのような影響を与えるのか、その結果企業の長期的目標達成にどのような効果をもたらすのかということに関するシナリオを描ける人です。例えば、「従来の業務の流れを見直す必要はないのか」、「従来の部門編成のままではよいのか」、「部門間のパワー関係に変化をもたらすのか」、「労働組合との間

で何か問題がおきそうか」、「他社はどう対応してくるか」、「他社への機密漏れをどう防ぐのか」等々、情報化に付随する様々な問題の相互関係を深く考慮して目標達成に向けた的確なシナリオを描く、そんな人だと思えます。

最後に「力のある人」は様々な考え方を理解し許容する柔軟性をもつ一方で自分自身の視点から一貫した考え方を提示できる人のように思います。どんな意思決定の状況においても動じることなく自分自身の理論をもって一貫して対処できる人です。だから力強い印象を与えます。アイデンティティのはっきりしている人ともいえません。ただ、自分の見方や価値を無理矢理人に押しつけるのではなく、人の価値を許容しそれを本質的に理解しながらも自分の価値をはっきりさせている、そんな人だと思えます。

そして社会科学を勉強することの意味

結論からいいます。「大学で社会科学を勉強することが将来役に立つ」と僕が主張するのは、社会科学を勉強することが、上であげた「力のある人」の三つの条件を

訓練することと強く関係していると思うからなのです。

まず「自分の仕事のあり方を本質に立ち返って問いかける」とか「常識といわれるものを本質的に理解し考え直す」ということに関して。これは社会科学の理論をその背後にある「視点」まで立ち返って理解し、疑問を抱き、他のありうべき「視点」を探り、新しい視点から現象を見直して理解を深めるといふ学習プロセスと強く関係しています。

次に「構想実現のための深い読みと洞察力をもつ」ということについて。これは特に、様々な社会科学の理論で展開される「道筋」を深く追っかけていくという学習プロセスと直接つながっています。

そして最後に「様々な考えを許容する一方で自分自身の一貫した理論をもっている」という側面。これは一方で「答えは一つの」思想から脱却して様々な理論を否定することなく理解するプロセスと、他方で様々な理論的考え方の中でどれが自分にとって心地よいかを反省的に理解していく学習プロセスと強く関係していると思います。

具体的にどうやって勉強していけば良いのか

では具体的にどうやって勉強していくのが良いのか。

僕の考えていることをまとめてみましょう。まず社会科学を勉強する上で重要なことは、「道具や材料」のレベルにとどまらないことだと思えます。どんな学問上の材料や道具（例えば会計上の数字や複式簿記）にもその後には必ず現象を見る上での特定の「視点」があるはず。その「視点」を本質的に理解しようとする姿勢がないと自分の現状や常識と呼ばれるものを根本的に見直す力はないと思うのです。さらに特定の「視点」をもつ理論がどのような道筋で物事を説明していくのかということも深く理解する訓練をしないと、深い読みや洞察力は身に付かないし、自分自身の一貫した理論をもつこともできないと思えます。

こうした理由から僕はまずどんな領域でもいいから偉大な（といわれる）理論家が真剣にものを考えて書いた著作を真面目に時間をかけて読むことが重要だと思っています。つまみ食いのいろいろな本をさーっと眺めるのも良い本のあたりを付けるという意味では必要かもしれない。

ません。でも本質的に重要なことは、理論が構築されていくそのプロセスを学ぶことだと思います。表面的ではダメなんです。時代背景も含めて理論化のプロセスを勉強することが必要だと思うのです。じっくり本を読むことはそのための一つの方法です。

これは参考になるかどうかわかりませんが僕は理論的著作を読むときこんなふうを読むようにしています。まずさっきいったように理論の背後にある「視点」の理解に努める。しかしその「視点」を批判することには一切エネルギーを注がない。ただしその理論的視点が自分にとって気持ちよいものなのかそうでないのかを自分を反省的に眺めながらはつきりさせようと努力する。次に理論の「道筋の一貫性」を批判的に検討する。その時侯がよくやる手は、四角と矢印を使って著者がどんな論理だてをしているのかを図に表してみることです。そうすることによって一貫性が欠落している部分を発見するわけです。まあこれは僕の方法であって皆さんには皆さんなりの方法があるのだと思います。

一橋大学の皆さんには本読み以外の別のもっと良い方法も与えられています。ゼミナルでの活動です。ゼミ

では先生との非常に密接で個人的なつき合いが期待できます。先生はみんなそれぞれの自分自身の理論を持っています。先生が(私生活を含めて)どんな背景からそういった理論的立場に立つにいったか、つまりその先生の理論化の具体的プロセスを学ぶことのできる格好の場がゼミなのです。そのためには先生のパーソナリティも含めて深く理解するくらい親密につきあうのが良いと思います。一緒に飲みに行くのもいい。研究室に頻繁に入りするのもいい。とにかくゼミに真剣にコミットして先生を体感する。そうすることによって本から学ぶよりはもっと深いレベルで、自分自身の理論構築のための具体的な方法を学べると思うのです。

こう書いていくと社会科学の「道具や材料」を勉強するのが意味がないかのように聞こえるかもしれませんが。そんなことは決してありません。「材料」つまり世の中で起きていることを知らなければ洞察力も読みも生み出されないし、社会を生きていく上での自分の理論を作りようがない。「道具」がなければ理論を実際に適用してみることができない。やってみなければわからないということとはたくさんあります。やはり数式モデルを自分で

書いてみないと経済理論の背後にある論理や視点を本当に実感として理解できないのではないかと思います。そのためには一時期集中してテクニク的なことを修得するなんてことも必要になる。ただ重要なことは「道具や材料」をつめこんで勉強するだけにとどまらず常にそれらと理論の「道筋」や「視点」とのつながりを考える癖をもつことだと思えます。結局は「視点」、「道筋」、「材料・道具」のレベルの間をいったり来たりするしかないのだと思えます。

最後に自分自身の理論を築き上げることに関して。いろんな理論を理解することは重要です。そしてその背後にある「視点」を批判しないという態度も重要だと思えます。しかし「理論的視点を批判しない」ということと「理論的視点を迎合する」とことは全く別のことです。むしろどの理論的視点が「好きなのか」、「きらいなのか」は常にはつきりと意識する必要があると思います。皆さんそれぞれ育ってきた環境が違うのだから考え方も違うはずですが。どの理論が自分にとって気持ちよいのかということが根本的に違うはずですが。ここのところをはつきりさせておかないと、結局、社会で生きていく上で

の自分自身の理論を築くことはできないのではないかと
思います。そのためには自分の行動や思考の癖を常に振
り返って理解しようとする姿勢が重要なのだと思えます。

おわりに

僕は最近就職したばかりだけれども、就職して一つ変わったことがあります。ずいぶん良くないことだと反省していることなんです。一つのことには長期間、真剣に、深く集中できないということです。これは僕の姿勢の問題もあります。就職してしまおうと自分の意図とは関係なくやるいろいろな出てきてしまおうということにも起因しています。一つのことには長期間、真剣に、深く集中して、その後それを反省的に振り返って見ないと、自分がどういう人間であって、どんな視点を気持ちよく思い、どんな自分の理論を構築していけば良いのか、ということとはなかなかわからないように思います。大学にいる四年間はそうして自分を理解していくプロセスにとつて格好の期間だと思います。特に何の邪魔もありません。だから大学時代をどう過ごしたかは後々大きく影響してくると思うのです。しっかり授業に出なさいなんて言う

つもりはありません。ただ、ゼミでも、講義でも、大学の友達でもいい。一橋大学にることによって幸運にも与えられるこれらのものと真剣につきあって常に反省的に思考をめぐらす。そうすれば「大学なんて役に立たない」とは決して思わないだろう、と僕はそう思います。

(1) 当時の状況については商学部の楠木助教教授が詳しい。

楠木助教教授の当時の状況については僕が非常に詳しい。知りたくなったら研究室をノックしてください。またこの小論と関係したテーマで楠木助教教授の書いた次の小論を読むことをおすすめします。「大学での知的トレーニング——アタマがナマっている人へのメッセージ——」『一橋論叢』

第一一三巻 第四号(通巻六五四号)、平成七年

(2) この手の話の詳細に関しては、商学部の沼上助教教授の

書いた次の二つの論文を参照してください。「経営学におけるマクロ現象法則確立の可能性——個別事例研究の科学としての経営学に向かっ」『組織科学』Vol. 28. 3. 1996年、「卒業式を『自由な人生』の葬式だと思っっている学生諸君へ」金井壽宏、米倉誠一郎、沼上幹編『創造するミドル』有斐閣、一九九四年

(3) こうした考え方を真剣に理解させてくれる本として次の本を紹介したいと思います。グレアム・T・アリソン著

『決定の本質・キューバ・ミサイル危機の分析』中央公論社、一九七〇年(Graham T. Allison, 1971, *Essence of Decision: Explaining the Cuban Missile Crisis*, Little, Brown and Company) この本は一九六二年におきたキューバミサイル危機にまつわる様々な「なぜ」を二つの概念モデルから説明しているものです。

(一橋大学専任講師)